

## 「自己カテゴリー」と「非自己カテゴリー」 の構造に関する研究

風間 文明

### 目 的

本研究は、自己をカテゴリー化するためのカテゴリーやそれと対をなしたり、他の選択肢となりうるような他のカテゴリーを、人がどのように認知し、構造化しているのかを明らかにすることを目的とする。

中村（2002）は、Turner（1987）の自己カテゴリー化理論における自己カテゴリー化に関して、上位カテゴリーがいくつかの下位カテゴリーに分類される過程や、自己を収めるべきカテゴリーを選択する際の心理的過程に関する観点が欠けていることを指摘した。つまり、Turnerによる自己カテゴリー化は、人が個人差的観点を捨てて所属カテゴリーの典型的特性を身につけた自己としてとらえる過程であり、その意味で「集団内自己カテゴリー化」を問題にしているため、分類によって抽出された多くのカテゴリーの中から特定のカテゴリーを選択し、そのカテゴリーに自己概念の一部を収めるという意味での、分類論的「自己内自己カテゴリー化」の過程についての考察が欠けているという指摘である。この問題意識に基づいて呈示された「自己カテゴリー明瞭化過程」の5段階説（中村，2002）をさらに整理し、中村（2007）は自己カテゴリー明瞭化過程の4位相説を提唱している。そこでは、第1位相において、自己カテゴリー化の可能性のあるカテゴリーの収集・構造化が行われ、第2位相では、その中から自己と整合するカテゴリーの選択・決定が行われ、さらに第3位相、第4位相において第2位相で決定された自己カテゴリーの確立・防衛と修正・改変が行われるとしている。

本研究では、この自己カテゴリー明瞭化過程の4位相説の第1位相から第2位相に焦点をあて、収集された多様なカテゴリーがどのように構造化されているかを検討する。自己カテゴリー化のためには、まずもって自己を収めるためのカテゴリーを収集する必要がある。それは、パーソナリティ、態度、行動傾向など自

己概念に相当するものや、所属集団、友人、職業など自己が包含される集団、対人関係、社会的位置に関するものなど多岐に渡っており、収集された後には何らかの基準で整理、分類され構造化されていると考えられる。本研究では、まず、この段階でどのような構造化がされているかを検討し、整理、分類の基準を明らかにする。自己カテゴリー明瞭化過程の第2位相では、収集されたカテゴリーの中から自己と整合するカテゴリーの選択・決定が行われるとされているが、この「自分にあてはまるか否か」の判断は、収集されたカテゴリーを構造化する段階でも分類の基準となりうると思われる。そこで、収集されたカテゴリーの整理、分類の際に自己を基準とした構造化が行われているか否かもあわせて検討する。

自己カテゴリーとして用いられるカテゴリーには、多くの場合、それと対になったり、あるいは同じ上位概念に分類され、他の選択肢となりうるようなカテゴリーが存在する。例えば、「男性」に対する「女性」、「東京都民」に対する「埼玉県民」、「神奈川県民」、「積極的」に対する「消極的」などである。あるカテゴリーを自己カテゴリーとして選択した場合、これらの関連するカテゴリーがどのように認知されているのかということは、この第1、第2位相における問題の1つだといえる。そこで、自己カテゴリーとそれに関連する非自己カテゴリーとがどのように認知されているかについても両者の構造から検討を加える。

自己カテゴリー明瞭化の第1位相におけるカテゴリー項目の収集・整理は、実際には、個人の生活や経験の中で、徐々にカテゴリーが収集され知識構造として蓄積されていく、長期的な情報処理過程であろう。第1位相におけるカテゴリーの収集・整理の過程を明らかにするためには、この長期的な過程全体をとらえていく必要があるが、実際にはそれを再現し可視化することは困難と思われる。そこで本研究では、多様なカテゴリー項目の分類課題を使って、その結果からカテゴリーの構造を推測する方法をとることにする。具体的には、自己記述に用いられるカテゴリーを含むカテゴリーリストを作成し、その分類を被験者に行わせ、分類パターンから構造を検討するとともに、分類の際に自己を基準とした分類が生じるか否かを確かめる。次いで、カテゴリーリストから自己にあてはまるものを選択した後に、選択されたカテゴリーと選択されなかったカテゴリーをそれぞれ分類させ、分類パターンの関係を明らかにする。

また、自己カテゴリーの内容は個人によって異なっているため、複数の被験者に共通のカテゴリーセットを作成することが困難であり、かつ共通のカテゴリーセットの分類によって得られた構造が個々人の自己カテゴリーの認知構造を十分に反映していない可能性が考えられる。そこで本研究では、被験者ごとに異なるカテゴリーリストの分類を行わせて個別の構造を明らかにし、複数の構造が蓄積

「自己カテゴリー」と「非自己カテゴリー」の構造に関する研究  
された時点で、分類方法をいくつかのパターンに整理していくことにする。

## 方 法

**被験者** 埼玉県内の女子大学（A 大学）で心理学を専攻する大学生女子 14 名を被験者とした。平均年齢は 19.1 歳（SD=0.5）であった。

**実験材料の収集** 実験材料として用いる自己記述用のカテゴリー項目を収集するために、20 答法による質問紙調査を実施した。自己記述を収集する方法として 20 答法の他に外山（2000）は Describe yourself 法を考案しているが、両者を比較した外山（2001）では、20 答法の方が純粋心理特性による自己記述よりも社会的特徴や所属集団への言及が多くなることが示されている。本研究ではカテゴリーを、純粋心理特性も含めたものとして広くとらえてはいるが、後のカテゴリーリストの作成のために、純粋心理特性だけでなく社会的特徴や所属集団のようなカテゴリー項目も収集する必要があることから、20 答法を用いることとした。

質問紙冒頭の教示文によって、回答者に「私は・・・」に続けて 20 の自己記述文を自由に作成するよう求めた。さらに実験時の項目作成の参考にするために、20 の文の内から「自分を最もよく表していると思うもの」5 つを選択するよう文章で教示した。

**カテゴリーリストの作成** 20 答法によって得られた自己記述文の中から、実験に用いるカテゴリーを 10 項目選択した。まず「自分を表すのに最適である」として被験者自身が選択した 5 つの項目を選択し、続いて、反対の意味になるカテゴリーや関連するカテゴリーを作成しやすいこと、極端に特殊なカテゴリーでないこと、カテゴリーとして不自然でないことを考慮し、さらに 5 項目を選択した。ここで選択したカテゴリーは、各被験者が自己カテゴリー化をする際に用いられるカテゴリーだと考えられる（以下、自己カテゴリーと呼ぶ）。

次に、この 10 個の自己カテゴリーをもとにして、それと関連するカテゴリーとして、反対の意味を持つカテゴリーと他に選択肢となりうるカテゴリーを作成した。例えば、自己カテゴリーが「明るい」であれば反対の意味の「暗い」を反対のカテゴリー、自己カテゴリーが「埼玉県民」であれば、「東京都民」や「神奈川県民」などを他の選択肢となりうるカテゴリーとした。10 個の自己カテゴリーそれぞれについて 2 項目ずつ計 20 項目の関連するカテゴリー（以下、関連カテゴリーと呼ぶ）を作成した。

上記の自己カテゴリーと関連カテゴリーは、いずれも被験者によって内容が異

なるものであった。次に、これらの被験者ごとの個別のカテゴリー以外に、全被験者が共通して必ずあてはまるカテゴリー（以下、共通自己カテゴリーと呼ぶ）とそれに関連するカテゴリー（以下、共通関連カテゴリーと呼ぶ）を作成した。共通自己カテゴリーは、「人間」、「女」、「大学生」、「A大学の学生」、「心理学専攻の学科に所属」の5項目で、いずれの項目も本研究の被験者が該当するものであった。また共通関連カテゴリーは、共通自己カテゴリーと関連があり、他に選択肢となりうるもので、「犬」、「男」、「社会人」、「B大学の学生」、「経済学専攻の学科に所属」の5項目であった。

ここまでで作成した計40項目のカテゴリーに、山本・松井・山成（1982）による自己認知の諸側面を表す項目から10項目を選択し、一般的なカテゴリー（以下、一般カテゴリーと呼ぶ）として加えた。一般カテゴリーは「体力に自信がある」、「個性的な生き方をしている」、「責任感がある」、「思いやりがある」などで、個別のカテゴリーと重複しない限りは、できるだけ被験者間で共通とし、重複するときには該当する項目を他のものと差し替えた。

以上、自己カテゴリー10項目、関連カテゴリー20項目、共通自己カテゴリー5項目、共通関連カテゴリー5項目、一般カテゴリー10項目の合計50項目から成るカテゴリーリストを被験者ごとに作成した。リストの一例を表1に示す。

**手続き** カテゴリーリストの内容をカード1枚に1項目ずつ記した50枚から成るセットを被験者に渡し、カード分類を行うよう求めた。まず始めに分類の基準を設けずに自由に分類をしてもらった。この1回目の分類で「自分にあてはまるか否か」という基準が用いられなかった場合には、2回目として「自分をよく表しているものや自分にあてはまるもの」を選び出した上で、その後は自由に分類するよう求めた。

制限時間は自由とし、被験者の許可をとって分類過程をビデオに録画した。2回の分類とも、分類終了後に、結果について被験者に説明を求めた。また分類課題の難易度を「1非常に簡単だった」から「5非常に難しかった」までの5段階で評定を求めた。その後、実験の目的を説明して質問を受けつけ、実験を終了した。

## 結 果

1回目の自由に行う分類において、自発的に「自己にあてはまるか否か」を基準として分類を行った被験者が2名いた。この2名については2回目の分類を実施しなかった。

表1 カテゴリーリストの1例

| 自己カテゴリー         | 関連カテゴリー (1)          | 関連カテゴリー (2)        |
|-----------------|----------------------|--------------------|
| 1 絵を描くのが好きだ     | 11 絵を描くのは好きでない       | 21 音楽を聴くのが好きだ      |
| 2 一度寝たらなかなか起きない | 12 寝ていても少しの物音で起きてしまう | 22 寝るよりも起きている方が好きだ |
| 3 なすの漬け物が嫌い     | 13 なすの漬け物が好き         | 23 キュウリの漬け物が好き     |
| 4 めいぐるみが好きだ     | 14 めいぐるみは好きでない       | 24 人形が好きだ          |
| 5 一人っ子          | 15 3人兄弟の真ん中          | 25 二人姉妹            |
| 6 お酒に強い         | 16 お酒に弱い             | 26 お酒が好き           |
| 7 空を見るのが好きだ     | 17 空を見るのは嫌いだ         | 27 海を見るのが好きだ       |
| 8 ものを大切に扱う      | 18 ものの扱いが雑だ          | 28 少し古くなったものはすぐ捨てる |
| 9 他人を信じられない     | 19 他人を信じられる          | 29 自分を信じている        |
| 10 だいたいいつも体調が悪い | 20 いつも体調がよい          | 30 自分の体調にはあまり関心がない |
| 共通自己カテゴリー       | 共通関連カテゴリー            | 一般カテゴリー            |
| 31 人間           | 36 犬                 | 41 体力に自信がある        |
| 32 女            | 37 男                 | 42 思いやりがある         |
| 33 大学生          | 38 社会人               | 43 人に対して寛大である      |
| 34 A 女子大学の学生    | 39 B 女子大学の学生         | 44 生き方に自信がある       |
| 35 心理学専攻の学科に所属  | 40 経済学専攻の学科に所属       | 45 個性的な生き方をしている    |
|                 |                      | 46 特技がある           |
|                 |                      | 47 きちょうめんである       |
|                 |                      | 48 責任感がある          |
|                 |                      | 49 目鼻立ちがよい         |
|                 |                      | 50 自由に使えるお金が多い     |

### 分類されたグループ数

カテゴリーリストの分類の結果、得られたグループ数の平均を表2に示す。1回目の自由な分類で自己を基準に分類した被験者の結果は2回目の分類として扱っている。

自由に分類したときと、自己-非自己による分類を行ったときとでは総グループ数に大きな違いは見られず、平均で11~12であった。2回目の自己-非自己による分類では自己カテゴリーの分類数(4.93)よりも非自己カテゴリーの分類数(6.93)の方が多かったが、これは、自己カテゴリーに含まれる項目数(M=21.79)が非自己カテゴリーの項目数(M=27.21)よりも少なかったためであ

表2 カテゴリーリスト (50 枚) の分類によるグループ数

|    | 1 回目分類 | 2 回目分類  |          |
|----|--------|---------|----------|
|    | 自由分類   | 自己カテゴリー | 非自己カテゴリー |
| 平均 | 11. 67 | 4. 93   | 6. 93    |
| SD | 3. 63  | 2. 87   | 3. 38    |
| n  | 12     | 14      | 14       |

注：2名の被験者が2回目分類で「分類不能」を1グループ生成した

ろう。

グループ数と5段階の難易度評定との相関係数を求めたところ、自由分類でのグループ数と難易度評定の間にのみ有意な相関がみられ ( $r = .66, p < .01$ )、多くのグループに分類した被験者はど分類課題を難しいと評価していた。被験者がグループを少数にしようとし、それができなかった場合に課題を難しいと感じていたのだと思われる。

### 自由分類の分類パターンの検討

各被験者の自由分類の結果を検討し、自己基準分類、上位概念分類、連想イメージ分類、関連性分類の4つのパターンに分類した。自己基準分類は、自己にあてはまるか否かを基準にした分類パターンである。上位概念分類は、50のカテゴリーを、性格、外面、社会的立場など、より上位の概念にまとめていく分類パターンである。連想イメージ分類は、あるカテゴリーを出発点としてそこから連想されるイメージに基づいて他の項目をまとめていく分類パターンである。例えば、「責任感がある」というカテゴリーから「社会人」を連想し、続いて「自由に使えるお金が多い」と連想し、同じグループにまとめるといった分類方法がこれに該当する。関連性分類は、実験材料としてカテゴリーを作成する際に、自己カテゴリーと反対の意味のカテゴリーや関連する意味のカテゴリーを設定したが、その関連性が分類の際にそのまま現れたパターンである。例えば、「文京区民」という自己カテゴリーに対して設定された「世田谷区民」、「豊島区民」という関連カテゴリーを「住んでいるところ」として1グループにまとめているような場合であり、上位概念分類と比べると、共通の言葉が含まれているなど一見してわかる表面的な特徴に基づいた分類である。

それぞれのパターンに該当する人数と相対度数を表3に示す。連想イメージ分類と関連性分類がそれぞれ4名 (28.6%) ずつと相対的に多かった。また自己基準分類を行った被験者が2名 (14.3%) みられた。

自由分類の結果から、カテゴリーの分類の際には、連想に基づく分類や表面的

表 3 各分類パターンの頻度と相対度数 (%)

|              | 自由分類 |        | 自己-非自己分類 |        |          |        |
|--------------|------|--------|----------|--------|----------|--------|
|              |      |        | 自己カテゴリー  |        | 非自己カテゴリー |        |
| I 自己基準分類     | 2    | 14.3%  | —        | —      | —        | —      |
| II 上位概念分類    | 3    | 21.4%  | 6        | 42.9%  | 4        | 28.6%  |
| III 連想イメージ分類 | 4    | 28.6%  | 3        | 21.4%  | 4        | 28.6%  |
| IV 関連性分類     | 4    | 28.6%  | 1        | 7.1%   | 1        | 7.1%   |
| V 価値判断分類     | 0    | 0.0%   | 1        | 7.1%   | 0        | 0.0%   |
| VI 自分との距離分類  | —    | —      | —        | —      | 3        | 21.4%  |
| VII 分類なし     | —    | —      | 1        | 7.1%   | 0        | 0.0%   |
| IVとVの混合      | 1    | 7.1%   |          |        | 1        | 7.1%   |
| IIとVの混合      | 2    | 14.3%  |          |        |          |        |
| IIとVIの混合     |      |        |          |        | 1        | 7.1%   |
| 総計           | 14   | 100.0% | 14       | 100.0% | 14       | 100.0% |

注：自由分類で自己基準分類を行った2名は自己-非自己分類にも含めた

な関連性に基づく分類が行われやすいことが示された。これらの分類方法は複雑な判断が少ないため比較的容易であるが、最終的に全てのカテゴリーを分類し構造化するのは難しい方法だと思われる。その他に、より上位の概念への分類と、自分にあてはまるか否かを基準とした分類がみられた。自己を基準とした分類が行われたことは、自己カテゴリー明瞭化の第1位相において、既に自己との整合性を考慮した構造化がされている可能性を示唆しているといえる。

### 自己カテゴリーと非自己カテゴリーの分類パターンの検討

2回目の分類において、カテゴリーリストの中の、自己カテゴリーと共通自己カテゴリーは、少数の例外を除いて、ほとんどが「自己にあてはまる」項目として分類されていた。よって、これらのカテゴリーについて被験者は、自分にあてはまる項目として認識できていたといえる。

自己-非自己による分類の結果を検討し、自由分類で抽出された4つの分類パターンから自己基準分類を除いて、さらに価値判断分類と自分との距離分類に、分類なしを加えた6つのパターンに分類した。価値判断分類は、自分の評価や好みに基づく分類で、自己カテゴリーであれば「自分の好きなところ」、「自分のなりたいところ」といった分類がこれに該当する。また自分との距離分類は、非自己カテゴリーに関して、自分との近さや遠さに基づいた分類パターンで、「自分にはないが、あこがれる」、「自分は絶対にあてはまらない」など自分との距離

表4 各被験者の分類パターン

| 被験者 | 自由分類      | 自己-非自己分類  |           |
|-----|-----------|-----------|-----------|
|     |           | 自己カテゴリー   | 非自己カテゴリー  |
| 2   | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   |
| 6   | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   |
| 4   | Ⅳ関連性分類    | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   |
| 9   | Ⅳ関連性分類    | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   |
| 12  | Ⅳ関連性分類    | Ⅱ上位概念分類   | Ⅵ自分との距離分類 |
| 1   | Ⅱ上位概念分類   | Ⅱ上位概念分類   | ⅡとⅥの混合    |
| 7   | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 |
| 13  | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 |
| 14  | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 | Ⅲ連想イメージ分類 |
| 3   | Ⅳ関連性分類    | Ⅳ関連性分類    | Ⅳ関連性分類    |
| 10  | Ⅰ自己基準分類   | Ⅴ価値判断分類   | Ⅵ自分との距離分類 |
| 5   | Ⅰ自己基準分類   | Ⅶ分類なし     | Ⅵ自分との距離分類 |
| 11  | Ⅲ連想イメージ分類 | ⅡとⅤの混合    | Ⅲ連想イメージ分類 |
| 8   | ⅣとⅤの混合    | ⅡとⅤの混合    | ⅣとⅤの混合    |

注：太字の番号は、自己-非自己カテゴリーを同じパターンで分類した被験者

に言及した分類である。

表3に示したように、自己カテゴリーに関しては、上位概念分類が6名(42.9%)と多く、非自己カテゴリーでは、上位概念分類と連想イメージ分類がそれぞれ4名(28.6%)と多かった。上位概念分類が多かったことから、自己カテゴリーは、より整理され構造化されている可能性が伺えた。また、非自己カテゴリーにおいては、上位概念分類と連想イメージ分類が多かったが、自分との関連でとらえようとする自分との距離分類も3名(21.4%)、上位概念分類との混合もあわせると4名(28.6%)みられた。非自己カテゴリーについては、自己カテゴリー同様に、より整理され構造化されている場合と、連想に基づく容易な方法による分類がされている場合、そして自己を基準とした構造化がされている場合があることが示された。

次に、自己カテゴリーと非自己カテゴリーの構造化の際に、同じ基準が適用されているのかどうかを明らかにするために、被験者ごとに自己カテゴリーと非自己カテゴリーの分類パターンの異同について検討した。表4に各被験者の分類パターンを示す。自己カテゴリーと非自己カテゴリーを同一の分類パターンで分類した被験者は14名中8名(57.1%)であった。残りの6名(42.9%)は異なるパターンでの分類だったが、その内2名は混合パターンで一部同一の分類法を用



いていた。また混合も含めて、自分との距離分類を用いた4名の被験者の内2名は、1回目の自由分類で自己基準分類を行った被験者であり、一貫して自分にあてはまるか否かを基準に分類を行っていたことがわかる。これらの結果から、自己カテゴリーと非自己カテゴリーの分類には同じ分類方法が用いられやすいこと、自分にあてはまらない非自己カテゴリーについても自己との関わりでとらえようとする場合があり、特に自発的に自己基準分類を行った被験者には一貫してその傾向がみられることが示された。

## 考 察

本研究では、中村（2007）の自己カテゴリー明瞭化過程の4位相の内、第1位相から第2位相に焦点をあて、自己カテゴリー化のために収集された様々なカテゴリーがどのような認知構造を有しているのかを明らかにするため、自己記述に用いられるカテゴリーを含むカテゴリーリストを被験者ごとに作成し、分類を求め、得られた結果の分類パターンを検討した。分類課題には、基準を設けず自由に分類する課題と自己にあてはまるものとあてはまらないものに分類した上で更にそれぞれを分類する課題の2通りを設けた。

まず、自由分類の結果の分類パターンとして、自己基準分類、上位概念分類、連想イメージ分類、関連性分類の4つのパターンが得られた。自己基準分類は、自分にあてはまるか否かに基づく分類で、自由分類においても自発的にこの分類基準を用いた被験者がみられた。上位概念分類は、自己カテゴリーに限らず一般的によく用いられる分類方法だと考えられる。この分類方法によると、具体的なカテゴリー項目をより抽象度の高い上位概念に分類していくため、少数のグループに分類され、より構造化されると考えられる。連想イメージ分類は、あるカテゴリー項目から連想されるイメージに基づいて別の項目を分類していく方法で、複雑な処理が必要でない分、認知的な負荷が軽い方法だと思われる。しかしその一方で、うまく連想が繋がらずに、こじつけになったり、最終的に分類できない項目がでるなど、構造化という点では不都合が生じる場合があると思われる。関連性分類は、共通の言葉を含んでいるなどカテゴリーの表面的な特徴にもとづく分類である。これも認知的な負荷が軽い方法だが、表面的な特徴が手がかりとなっているので少数項目から成るグループが多数発生し、それ以上に分類を進めにくくなるため、やはり構造化がされにくい方法と思われる。

自由分類では、連想イメージ分類、関連性分類をとった被験者が多かったことから、第1位相で収集された多様なカテゴリー項目の整理・分類には、あまり認

知的な労力がかけられていない、よって十分に構造化されていない可能性がある。しかし、これらの分類パターンが多く見られたのは、本研究で、分類課題という形をとったために、被験者が課題に対してなるべく負荷の低い方略を選択したためである可能性も考えられる。この点はカード分類の結果から実際の情報処理過程について推測しようとする本研究の限界であり、今後、実際に人がもっている知識構造を検討するなどして、同様の分類パターンがみられることを確認する必要がある。

今回の実験では被験者が14名と少数であったが、その中で、自由分類において自己基準分類を行った被験者が2名みられたことは注目すべき点だと思われる。収集されたカテゴリーの整理・分類の段階で、既に自己を基準に分類する場合もありうることを示唆しているからである。この2名の被験者がなぜ自己基準分類を行ったかについて明確な説明は得られず、また他の被験者との違いも特筆すべき点は見いだせなかった。そもそも今回用いられたカテゴリーリストは被験者ごとに作成されていたので、本人を容易に特定できる項目も含まれていた。そのため分類の際に自己が基準として活性化しやすかったのかもしれない。しかし、そうだとすると逆に自己基準分類を行った被験者が少ないように思える。今後、分類基準として自己が用いられやすくなるような条件を探索する必要がある。

自己カテゴリーと非自己カテゴリーの分類において、まず自己カテゴリーについては、上位概念分類が多かった。自己に関する事柄は日頃から考える機会も多く、より構造化されているのだと思われる。そのためより抽象度の高い上位概念分類が可能なのだろう。非自己カテゴリーについては、上位概念分類と連想イメージ分類が多くみられた。非自己カテゴリーについては、自己カテゴリーに関連のあるカテゴリーが多く含まれているので、自己カテゴリー同様に整理、分類されている場合と、自分にあてはまらないカテゴリーの処理なので、負荷の軽い分類方法がとられている場合とが考えられる。

また一部に、非自己カテゴリーに関しても自己との関わりでとらえようとする自己との距離分類がみられた。この分類を行った3名の内2名は自由分類において自発的に自己基準分類を行った被験者であった。一度、構造化の基準として自己が用いられると、自己との関わりでカテゴリーを認知する視点が活性化し、自己にあてはまらないカテゴリーに対しても自己との関連でとらえる場合があるといえよう。自己カテゴリーと非自己カテゴリーの分類パターンの一致は他にも多くみられたため、両者に対して同様の構造化を行っている可能性が示唆された。しかし、本実験のような分類課題に対して、単に分類方法を一致させただけであるという可能性も残されているので、さらに検討が必要であろう。

本研究で得られた分類パターンの数から推測すると、自己カテゴリー明瞭化過程の第1位相におけるカテゴリーの構造化のパターンは、それほど多様ではなく、抽象度や認知的負荷の軽重のレベルが異なる少数のパターンに分かれるのだと思われる。そして、この段階で既に自己を基準とした構造化が生じる場合もあるようだ。このことは、カテゴリー項目の収集・構造化の段階である第1位相と、自己と整合するカテゴリーの選択・決定の段階である第2位相とが、極めて接近しているか、あるいはほぼ同時に起こる場合もあり得ることを示唆している。また、この段階での問題の1つである、自己カテゴリーとして選択されなかったカテゴリーの構造については、やはり自己カテゴリーと同様の構造化や自己との関わりに基づく構造化が行われる場合が少なくないことが明らかにされた。このことは、自己カテゴリーの選択・決定過程が、それと関連するカテゴリーとの対照、比較を含む過程であることを意味していると解釈できる。

今後の研究の視点として、まずは本研究で示された自己基準分類と、非自己カテゴリーに対する自分との距離分類を生じさせる条件を探索することが肝要であろう。どのような条件がそうとカテゴリー分類の際に自己基準が活性化するか、その要因が特定できれば、自己カテゴリー明瞭化過程における第1位相と第2位相の関係をより明らかにできるであろう。例えば、自己注目の高まった状態などの状況要因や自己意識、自尊心といった個人要因などが自己基準の活性化に影響を及ぼしているかもしれない。本研究での分類課題を行う際に、個人差変数を予め明らかにしておく、課題時に実験操作を施すなどの方法で、その効果を検証することが可能だと思われる。

最後に問題点として、本研究の結果得られたカテゴリーの構造が分類課題という状況で発生したものであり、実際の第1位相での構造化過程をどの程度反映しているのかという点があげられる。この点については、先述のように実際の構造化過程を対象とすることの困難さから、分類課題という方法をとったが、やはり課題に対する方略としての分類が行われていた可能性も否定できない。今後は、自己カテゴリーに限らず、例えば既に被験者が持っている一般的な知識構造の検討や選択課題など他の方法を使った結果などで補い、課題状況と実際の認知構造との対応を、より明確にしていける必要があるだろう。

#### 引用文献

- 中村陽吉 (2002). 対面場面の心理過程 プレーン出版  
中村陽吉 (2007). 「自己カテゴリー化の心理的過程」を巡って 本書第1部「その2」  
外山みどり (2000). 自己記述に関する記述的研究—Describe yourself 法によるデータをもとにして—日本社会心理学会第41回大会発表論文集 208-209.

## 第2部・1章その3

外山みどり (2001). 自己記述を規定する条件—標準的 TST と Describe yourself 法との比較—日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集 512-513.

Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group*. Blackwell Publishers. 蘭千壽他訳 1995 社会集団の再発見 誠信書房

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

注 本研究の一部は日本社会心理学会第 46 回大会において発表した。